

小津久足「神風の御恵」について・付翻刻

菱岡, 憲司
有明工業高等専門学校

<https://doi.org/10.15017/25263>

出版情報 : 文献探究. 48, pp.1-19, 2010-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



小津久足「神風の御恵」について・付翻刻

菱岡 憲司

「神風の御恵」について

小津久足「神風の御恵」は、天保九年（一八三八）三月十九日から二十四日の六日間にかけて、太々神楽を奉納するべく、「若人ども」を伴って神宮（伊勢神宮）に赴いた折の記録である。時に久足三十五歳。小津久足については、拙稿「馬琴と小津桂窓の交流」⁽¹⁾等を参照されたい。

「そもこの太々神楽は、そこばくの金なくては執行しがたきによりて、おほくは講てふものをむすびて、多人の力もて執行するがおほきを、たゞみづからの力もてこたびのごとく執行せしは、ためしすくなきことなりとぞ」と述べるように、太々神楽は、伊勢講（太々講）を結成して旅費を積み立て、籤にあたったものが代参して執り行うのが一般的だが、久足は自己資金のみで奉納しており、その分限者ぶりが知れる。

久足の紀行文は、「道しるべのためとせるが主なれば、詞つかひは客なり」（『浜木綿日記』天保十年）との考えから、不必要な文飾を省

き、行程をこと細かに記録するのが常である。本書でも、二見浦への往還、前山の遊歴等の道程が記されるものの、太々神楽奉納という目的から、御師を通じて太々神楽を執り行う段取りや、古市遊郭での遊興の様が記述の中心となっており、他の久足紀行文とは少々趣が異なる。天保九年時における伊勢の風俗を記し留めたものとして、『神宮参拜記大成』⁽²⁾所収の諸紀行を補うに足る内容といえよう。また本書の特筆すべきは、太々神楽奉納や古市での遊興に際し、久足および「若人ども」の心情を丹念に綴っている点である。事務的な書きぶりに徹した記録では表現できない、晴れの場における人々の胸の昂ぶりや、当時の息づかいが伝わってくる。

「神風の御恵」の書誌

「神風の御恵」は、三重県立図書館、日本大学総合学術情報センター¹、天理大学附属天理図書館に所蔵される。翻刻の底本とした三重県立図書館所蔵本の書誌を記す。

三重県立図書館・武藤文庫(980/オ/1)。一冊。244×168 ㎜。袋綴。表紙は無地鳥の子色。外題「神風の御恵 全」と左肩に単枠題簽。内題「神風の御恵」。十行書。二十四丁。印記「武藤蔵書之印」(朱陽)。胡粉による訂正あり。付箋あり(十八丁オ「御屋根ざぐらの事、諸説紛々たり。まづ俗説によれり」。奥書「天保九年といふ年のやよひ／小津久足」。

武藤文庫とは、元三重大学教授の武藤和夫氏の旧蔵書であり、詳しくは拙稿「小津久足「花鳥日記」について・付翻刻」⁽³⁾を参照されたい。

また、日本大学総合学術情報センター所蔵本の書誌は、以下の通り。

日本大学総合学術情報センター(081.8.0.99/22)。一冊。251×174 ㎜。仮綴。共表紙。外題「神風の御恵 記行廿二 全」と表紙左に打付書。内題「神風の御恵」。十行書。二十四丁。印記「日本大学図書館蔵」。胡粉による訂正あり。付箋あり(八丁ウ)。奥書「天保九年といふとしのやよひ／小津久足」。

旅程

天保九年三月十九日。小津新蔵(与右衛門)家と師檀関係にある御師「北御門なにがし」との打ち合わせどおり、明け方に松坂の自宅を立出する。新茶屋の「秋田屋何がし」のもとにいたると、一行は丁重に迎えらる。本書における太々神楽および古市遊郭に関連する記述は、後にまとめて紹介する。

小俣を経て、宮川にいたる。宮川の渡船は無料であるが、混雑を避けて別途用意した船に乗る。宮川を渡った後、二見にて襦ぎを済ませて御師に入るのが通例であるが、雨であるため直接御師に向かう。館にある北御門の家に着き、饗応を受ける。日も暮れ、迎えの男にすがり古市の妓楼に向かう。尾上坂^{オベ}を登り、長峰(古市)にいたり、備前屋にて一夜を明かす。

二十日。妓楼に迎えが来る。御師にて朝餉と湯浴みを済ませ、襦ぎのため二見に向かう。二本木を過ぎ、二軒茶屋で休憩して黒瀬にいたる。汐合の渡より五十鈴川を渡り、二見村の角屋にて昼食を食べる。

浜辺づたいに立石(夫婦岩)にいたる。手水鵜飼し、立石の来歴を考察する。御塩殿の古雅な器物を見たいと思うが、「こたびはさるみやびにはあらぬつひでなれば」と自重する。

また汐合の渡にて渡船し、宇治の方へ向かう。小朝熊神社を遠くより拝す。桜咲く鹿海村を通り、楠部村を過ぎると、右には西山の桜、左には西行谷・菩提山の桜が一目に見える。

西行谷・菩提山に立ち寄りたく思うも、「こたびのごとく繁華をむねとせしついでには、こゝも、はた、いかゞなれば」と、立ち寄りなぬ。久足は、桜の咲く季節に合わせて名勝旧跡を訪ねるのが常であり、満開の桜とあつてはとりもなおさず訪れそうなのだが、太々神楽奉納を主目的とする今回の旅は、「みやびにはあらぬつひで」「繁華をむねとせしついで」であるため、風流事は差し控えるという姿勢を示す。久足が目的を持って旅を行い、紀行を綴っていることがうかがえる。

宇治の町に入り、宇治橋より林崎文庫の桜を見る。「いにし文政十二年といふとし、この文庫の碑文、わがともがらはかりて、本居翁の

文を多りてたてたり」と述べるのは、現存する本居宣長撰・屋代弘賢書の碑文を指す。

五十鈴川にて手水鵜飼をし、大宮に参詣する。半神楽を奉り、「同伴の人ども」は玉串御門前にて参拝するも、久足は「諸人の拝所」で拝す。これは『延喜大神宮式』に拠って、古くは皇族ですら参拝を制限されていたことを鑑み、「凡人のぬさ奉ることなどは、いとかしこきこととして、よの常の拝所にてふしをがみ奉るだに猶かしこければ、まして御垣のうちにてはさらなり」との考えからである。以前は、宇治山田の人々の拝所にて拝していたが、それは「大和魂みがきし心まどひ」であつて、現在は「たゞ今の御代の御さだめにたがはざるこそよけれ」と「諸人の拝所」で拝するようになった経緯を記す。ここに、「花鳥日記」（天保五年）よりの〈古字離れ〉（⁴）また商人の分を守るといふ久足の姿勢（⁵）が看取される。

荒祭宮・風宮を詣でた後、楠部にもどる。楠部川ほとりの「勘七といふ家」にて饗応を受け、夜はまた備前屋にて過ごす。

二十一日。一番鬨にあたったと御師より迎えがあり、湯浴みして麻袴を着、御師の邸内で太々神楽を執り行ふ。次いで外宮に参詣し半神楽を奉ずる。

続けて末社めぐりをするも、「もる人ども」は社名を確かに告げることができずに「口よりいづるまゝなるそゞること」を述べて、社名を記した札を読ませまいと「札のまへに四手かけてかく」す者さえいる。「宮鳥とて、人々のにくみきらふも、うべなること也」と久足は記す（⁶）。

御師に帰り、饗応を受けると、夜も更ける。

二十二日。同伴の「若人」は通例にしたがい朝熊嶽に登るも、「われはもとより朝熊にのぼることをいかゞにおもへば」と、久足一人、別行動をとり、桜の名所として名高い前山に赴く。

豊宮崎文庫の「御屋根ざくら」を見て書院を見学し、世義寺の桜を横目に前山村にいたる。和泉式部社・氏神などをめぐりつつ散策するが、大木の切り株は多いものの、桜の木立はさほど見受けられない。理由を問うと、「桜おほくては、おのづからみる人もおほくて、畑におふる菜・麦などをわりなくふみあらしなれば、この村のために、桜は、はなはださまたげとなることおほきとて、つぎ／＼に里人どもがきりつくせしなり」という。しかし久足は、風流を解さぬ村人の行いを一方的に批判することではなく、「まことに花を賞するともがらは、田畑のものをむげにしかせんや。こは花をかごと酒のみくふ酔狂人どもがあしき也。その酔狂人とこの村人のしわざをくらべなば、なほ酔狂人のかたこそ罪ふかゝるべけれ」と、村人の行いに理解を示す。

道を引き返し、中山寺にいたる。開基の宝鑑国師は、当時閑寂であった古市近辺を勧められたものの、「こゝはとしへて後、繁華と変ずべし。なか／＼に今の街道こそ、後に寂寞の地となるべけれ」と、先見の明を働かせてこの地に開山したと久足は記す。

世義寺・妙見山・常明寺の桜を遊覧し、その桜の多さを賞して「中々に神都とはいはずして、花の都とこそいはまほしけれ」との感懐を抱く。

二十三日。「けふは休足とて、一日とゞまるがならひ」と、古市の

妓楼に滞留する。日中、遊女をともなつて寂照寺・観音堂をめぐる。

二十四日。妓楼より御師にもどり、「いでたちの本膳」を食して、駕籠にて新茶屋に向かう。堤世古にて妓女に送り出され、宮川を渡る。新茶屋にて提重のもてなしを受け、松坂に帰着する。

太々神楽と御師

太々神楽について、多田義寛（南嶺）は、その著『ぬなほの尊菜草紙』（寛保三年序）⁽⁷⁾中の「伊勢太々神楽之事並祓箱書付之事」において、次のように批判する。

神楽にて事たりぬべきに太神楽あり。是にても物を得るに飽がたく太々神楽あり。奪ずんば飽ずとは、是等の事にや。官幣使に太々神楽の古義有や。いつ勅裁有てはじまりたるにや。起原証文たしかなるまじ。その根をおすに、神楽といふ事の子細をしらぬゆゑか。物のほしきか。

多田義寛は『宮川日記』⁽⁸⁾でも、「太々神楽の事近世設ケ出せし事にて古風とも見へぬ」として、御師が檀家から金銭を得る手段として太々神楽をはじめたのではないかとの考えを示唆しつつ、「今師職の徒渡世の道なれば強ても論じがたき事也」と、その営みに一定の理解を示す。

久足も、太々神楽が古式ゆかしいものではないことは自覚していたように、本書の冒頭、太々神楽を「こは今めきたるさまにて、いにし

へのさまにはたがへり」と批判する「ものしり人」の見解を紹介したうえで、みずからを「ものしらぬわれら」と卑下して、「たゞ家内安全をこひねがふの外なければ、此御神楽をとりおこなふは、いともありがたき身の面目になむ」と、その由来はさておき、現今の制度化された太々神楽を享受する。

太々神楽奉納という行為に、神宮への崇敬の念が根底にあることは疑いないが、古市遊郭での遊興を最たるものとして、行程にはパッケ―ジツアーのように娯楽が盛り込まれる。「よの常のためしは、新茶屋より二見にもものして御師に入、つぎの日内宮にまうで、それより朝熊にのぼり、楠部にくだり、そのつぎの日御神楽あるがならひになん」と記すように、初日に二見浦で禊ぎを済ませてから御師の宿所にゆき、翌日、内宮参詣の後、朝熊嶽登山をし、三日目に神楽をあげるのが通例だという。今回は雨天のため、二見行きを二日目に回しており、状況に合わせて臨機応変に行程を変えるなど、イベントを滞りなく消化するべくスケジュールを管理し、要所要所で案内を差配する御師は、さながら添乗員の趣である。

その配慮は宿所のみならず、食事や休憩場所にも及ぶ。まず宮川以西の新茶屋にて「秋田屋何がしの家に、けふのまうけに幕張わたし、門にはむかひ札とてゆゑゆしく名をかきしるし、代官てふ人ども、ものくしく袴つけて、もてなしいとあつし」と歓待を受け、以後は「毛氈をまとひ、めさむるばかりの紅の蒲団」を敷いた太々駕籠にて移動する。御師の宿所でも「御師の門は竹をたて、それに注連縄をひき、玄関には幕はりわたし、左右には高張てふ挑灯をかけ、いとかめしきかまへなるが、これ、はた太々のしるし也」と迎えられ、二見村の角屋で昼食の折も「この家にも幕はりわたし、かのむかひ札をた

てたり」、また内宮参詣後に立ち寄った楠部の「勘七といふ家」でも「こゝにも幕はりわたし、例のごときもてなしなり」と、行く先々で幕と「むかひ札」をあつらえた店で休憩し、豪勢な料理が饗される。その往還は太々駕籠であるので、食事・休憩・宿所・交通手段等、旅に関わる諸雑事は、すべて御師が一手に引き受け、久足一行はただイベントを楽しむだけでよい。古市の妓楼で夜を明かした後も、抜かりなく迎えを寄こす。

太々神楽は、三日目の二十一日に御師の邸内で執り行った。前夜は妓楼で明かしたが、朝早く迎えがきて準備を急がせる。それは「けふの御神楽一番の鬨にあたれるとて也。こは二番にあたれば、時刻おくるれば、一番にあたれるを幸とよろこぶ」との理由による。

久足と師檀関係にある御師、北御門は、外宮近くの館という地に邸を構え、「この家は大宮司家の改所つとめらる」と格式も高い。入浴し、麻裃を着て席に赴くと、「御むろは則、御山といひて、袖もてひまなくかこひて、四隅にはたまをかけつらねたり。前には釜をおき、四隅の柱はうるはしき金綱にてまき、あたりにはひまなく白ゆふをかけたわし、いともくゆゑありげなるかざりぎまにて、神楽衆といふは、いと所せきまでゐならびたり」とすでに準備は整っている。

はじめには、先家内の穢をはらふ行事あり。それすみて主の拝あり。この拝はよの常の師職にてはなりがたく、家にゆゑよしなくてはなしがたきを、この家は大宮司家の改所つとめらるれば、則緑袍にて神拝の祝詞あり。これよりその神楽はじまりて、老女まひいづれば、鼓・笛・大鼓などうちならし、うたひものあり。そのうたひものいかなることとも聞とりがたく、古雅ならず、今めかしからず、

一種の拍子なり。この大鼓のなる時々、この席へ錢をまくがならひ也。つぎくゝに舞ありていとながく、半すみたるほど席をしぞきて、赤飯にてもてなしあり。かくて又もとのむろにいり、山舞・扇舞・四手の舞などいふ舞はてゝ、則「神拝せよ」とすゝむれば、御山ちかくをがみ奉る。この三つの舞は拍子もにぎはしくて、いと心もかきたつやうにあんなれば、ことさらにこの時錢をおほくまくなりけり。すべてのさまいとかたじけなく、にぎはしきもの也。

華やかな神楽の様がうかがえる。

ところで「伊勢乞食」との言葉もあるように、伊勢は参宮客目当ての乞食の多さでも知られる。緋色も鮮やかな太々駕籠や、宿所・休憩所の幕・むかひ札は、太々の客を見出すのに都合がよいようで、一行は折に触れて「それ太々さま。これ太々さま。錢まきたまへ」と時錢を乞われる。本書で記録するだけでも、新茶屋、御師の宿所への出入り、黒瀬、二見の角屋、楠部、太々神楽奉納時、妓楼への出入り、とひつきりなしにせがまれる。なかでも、右に引いた太々神楽奉納時は、「大鼓のなる時々、この席へ錢をまくがならひ」であるため大いに振る舞っており、時錢も太々神楽の一部として制度化されている感がある。また久足も、「なかくゝにわれはがほにほこられて、ところくゝにて錢まきちらし、いと心ゆく」と、乞食をうるさがることなく、かえって時錢に誇らしさを感じているようである。こうした情景、および心情を記しとめるのも、久足らしさといえよう。

古市遊郭

島原・吉原に伍して三大遊里と呼ばれた古市は、寛政期（一七八九〜一八〇一）に全盛を迎える。享保期（一七一六〜一七三六）、徳川宗春の開放政策に活気づく名古屋に進出した古市の妓楼は、宗春の失脚とともに引きあげるものの、伊勢に都会の華やかさを持ちこんで活況を呈する。下って寛政六年（一七九四）、古市を襲った大火がかえって遊郭改築の好機となり、繁昌を極める。宇佐美屋・備前屋・中村屋・千歳屋など、名古屋進出した妓楼のうち、宇佐美屋は元文（一七三六〜一七四一）ごろには料理茶屋に転じ、中村屋・千歳屋も杉本屋・油屋にその地位を奪われるものの、備前屋は明治にいたるまで古市を代表する妓楼であり続けた⁽⁹⁾。

本文中に「牛車楼」とあるため、久足一行が遊んだのはその備前屋だと知れる。「備前屋は牛車楼と号し、源氏車の紋所である。名古屋遊廓新設に同調して、出店を西小路へ出した際、ある日、高貴の人が牛車で来遊したのを面目とし、その記念にこの号を用いたということである。また備前屋が伊勢音頭を始めた歴史は、古市妓楼中もつとも古く、遠く寛延年間という」（野村可通『伊勢古市考』）と、伊勢音頭の発祥ともいえる備前屋は、数多い古市妓楼のなかでも随一の格式を誇る。いま、「神風の御恵」の記述によって、天保九年時の備前屋における遊興の様子をうかがってみる。

備前屋の久足一行へのもてなしは、御師との連携も密に、宮川以西の新茶屋からはじまる。

盃もあまたたびめぐるほど、うつくしく蒔絵したる文箱のながく大
きなるに、紅綱の色あひ、えならずむすびたれたる手にもちて、
さたすぎたる女出来たり。こは七夕の文使にしては花なし、なにな

らむとおもへば、すなはち古市の牛車楼より饅頭てふものおくりこ
したる使也。「こよひはかならず」など消息聞えたるには、若人ど
もの心は、はや時めきて、「御神楽の笛鼓のしらべより、先かの楼
の三味線の声を」とおもふらんも、おのくまごころにて、神の御
心にはかなひつべし。

古市遊郭の接待は、文使にはじまり文使に終わる⁽¹⁰⁾。遊女より
の情のこもった手紙は、立ち寄る前には期待を高め、別れの後には遊
興の記憶を美しく彩る。「若き人どもは、山海の珍味もめにつかず、
そごるにけふの消息のかへりごとせまほしきはひみゆる」と、同行
の若人の気持の昂ぶりが伝わる。

御師に着いたのち、ひととおり接待が済むと、楼より迎えが来る。
長峰（古市）にいたると、「家々にともし火つらね、楼どもには三の緒
の声々かしましきも、げに不夜城の妙境にて、あらぬさかひに來たら
んごとし」と一方ならぬ賑わいである。さらに太々神楽をあげる客は
「うへなくよろこびもてはやすがならひ」であり、備前屋に着くと華
やかな歓待を受ける。

先楼にのぼれば、やがてうかれ女どもむれいでたり。そのみなら
ぶさま三くきにわかれたるは、いとわかきかぎりと、人なみにもか
ずまへられたると、又人なみよりぬけいでたると也けり。燭台あて
やかにともしつらねたるをそむけがほなるは、衣の色あひもうるは
しからず、身もあたゝかならぬきはならん。こは「末の松山波こさ
じ」とちぎりし人のためにせしなるか、又はまくらにまめやかなら
で、かゝるさまなるか。わざとゝもし火のもとによりて、あたらし

き衣ほこりに瑠璃の光かゞやかしがほなるは、めにつくかたもあれど、中々にあはれはすくなし。

歓待の様を克明に描写しながらも、灯火から顔を背けがちで衣装も整わない妓女に目をとめ、契った男がいるのか、あるいは房事に不熱心なためあえてそうしているのか、と事情を付度する久足の観察がたのしい。

久足と交誼を結んだ馬琴（11）は、久足の生まれる以前（久足は文化元年（一八〇四）生）、享和二年（一八〇二）に上方を旅行し、伊勢にも立ち寄った。その折の紀行文『羈旅漫録』（12）に、古市遊郭の様子を書き記している。

古市はいづれも大樓なり。見せは暖簾二重にかけてあり。軒はつねのうれんの如し。奥行一間の土間ありて、そのあがり口に又長暖簾をかける。見せの隅にちひさき曲突クツトから茶がま一ツかけてあり。是は茶店の名目なればなり。

○古市にて客あれば、家内のおやま残らず出て次第よくならぶ。大かた十五六人廿人ばかりなり。扱盃出て酒もりはじめれば、衆妓酒の相手になり、一人毎に客に盃をさす。その内二人三絃を鳴らし衆妓同音にうたふ。その内にて客の目にとまりし妓を定むれば、その妓つとたちて客の傍に居る。衆妓は猶席にありて興を添ふ。このうち追々客あれば妓五六人わかれてその客をもてなす。閨房に入るの時にいたりて衆妓はじめて散ず。それまではほしいまゝに貪り食ふてあそぶなり。

馬琴の旅した享和二年は、寛政の改革の後でもあり、古市の全盛期は過ぎていたものの、「古市はいづれも大樓なり」といまだ勢いは衰えていない。馬琴も珍しげに記す古市独特のシステムは、久足の遊んだ天保九年にも健在で、一行も居並んだ妓女のなかから一晚を伴にする相手を選ぶ。もつとも久足は「この楼には、はやくよりをりくものせしこともあ」るため、馴染みの遊女が隣に座る。一方、同行した若人は、真剣に相手を選ぶ。

今宵あらたに来たるわか人は、そのあまたの花の中にも、ことに心にかなふをえらまむとすめり。そのかほをひそかにみれば、さすがにまほにもみかねて、めをなゝめにしていとくるしげ也。こはもとより心すべきことにて、たゞおもぎしのうるはしきをのみ心がくれば、よるのめたどくして、もがさのあと、又は色あひくろきを、紅粉の色さしもて、たくみにつくろひえたるがあたりて、浦島の子が玉手匣ならねど、あけてくやしききぬくの床、いとものすさまじきためしもすくならねば、たゞ筭の光と衣の色あひのあたらしきにめをつくれれば、さばかりのたがひはなきものぞかし。

「さすがにまほにもみかねて、めをなゝめにしていとくるしげ」に妓女を選ぶ若人の様子を描きながら、「たゞ筭の光と衣の色あひのあたらしきにめをつくれれば、さばかりのたがひはなき」と、品定めのコツを記す。結果、「えらみえたるもあり。いとつたなきえりかたなるもあり」となった。

初日の十九日の夜、続く二十日の夜、さらに二十二日の夜から二十四日の朝にかけて一行は備前屋で過ごす。つまり妓楼に寄らなかつた

のは二十一日だけで、二十三日は終日、古市にとどまるなど、費やす時間の長さからしても、いかに古市での遊興が、この「ツアー」で重きをなすか知れる。

先に触れたように備前屋は、伊勢音頭の発祥としても知られ、せりあげ舞台まで備えた「桜の間」はとりわけ有名である。久足は、その伊勢音頭の様子も克明に記録する。

こよひこの樓のをどりをみる。このさとにても、この家のをどりは、わきてそのさまえん也とかや。廻廊には紅の挑灯もしつらね、わらはどもは提灯ともして、もうけの席の入口までしるべす。その席は、名だゝる桜の間にして、ひるのごとくともし火ともしつらね、幔幕をはれり。やがて拍子木うてば、^{チカ(夕)}地方とて三の緒、又胡弓てふものする妓、左右より三人づゝ出来たりて、毛氈のうへに座をしむると、やがて百千の雷のごとき声して椽はゆらめき、いついかなることかとおどろけば、その椽に高欄いできて、又桜のかたをぬへる幕めくもの、その椽につきてあらはれいでつゝ、そのさまいとめぎまし。かくて伊勢音頭といふもの、かの地方にてうたへば、拍子につれて一時に妓女どものをどりいづるさま、いとめでたく、首尾よくとゝのへり。この音頭をしぼしのほどはむなしくうたひて、ほどよく一時に妓女のあらはれいづるさま、ことによし。「この伊勢音頭としもいふものは古風や」とて、なまさかしらにいひおとす人もあれど、こはわがいせの国にはおのづからよく具したるものにして、この国内にては、いかにたくみなる絃歌とて、この右にいづるとあたはずとぞ。

出立の日になつても、若人は「雨いみじくふれかし。そをかごとに今日一日を」と備前屋から離れたがらない。御師にて「いでたちの本膳」を食べる間も、「しぶくゝなるくひざま」である。これは若人を描きながらも、久足の心情を仮託したものであるだろう。

本書では、往路、新茶屋への使いを「七夕の文使」に喩えたのをはじめ、備前屋でも「このさとにものするは、はつか一年に一度ばかりのことなれば、心はあたかも七夕のごとし。さればけふの使の七夕の文使に似たるもゆかりなきにはあらず」と述べる。この七夕のアナロジイが久足は気に入ったようで、帰路、宮川まで送りに来た遊女と別れる際も、「なか／＼に若人はうちしをれがちにて、宮川の船こぎいだすほどは、牽牛のこゝちして、天の川にもなずらへおもふなるべし」と、牽牛と織女の別れに重ねる。

七夕は一年に一度、まして太々神樂奉納は、通常一生に一度あるかないかである。その晴れの旅行の高揚感が、本書には横溢している。

注

(1) 菱岡憲司「馬琴と小津桂窓の交流」『近世文藝』90号、日本近世文学会、H21・7。

(2) 『神宮参拜記大成』増補大神宮叢書12、吉川弘文館、H19・7。

(3) 菱岡憲司「小津久足「花鳥日記」について・付翻刻」『文献探究』47号、H21・3。

(4) (3)に同じ。

(5) 小泉祐次「小津久足自筆稿本『小津氏系図』と『家の昔かたり』について

(二) 「鈴屋学会報」 5号、S 63・7。

(6) なお久足は、天保十一年に男体山に登った際にも、「かくたとしへなく、か
しこき御山なるに、御社ちかく末社なみたちて、まうづる人に銭をむさぼり
とらむとする人どもの居たるは、またく伊勢のごとし」(「陸奥日記」と記
している)。

(7) 多田義寛『蓴菜草紙』日本随筆大成第二期7、日本随筆大成刊行会、S 3
・12。

(8) 『神宮参拜記大成』(前掲) 所収。

(9) 野村可通『伊勢古市考』三重県郷土資料叢書46、三重県郷土資料刊行会、
S 46・7。野村可通『伊勢の古市あれこれ』三重県郷土資料叢書74、三重県
郷土資料刊行会、S 51・3。

(10) 古市遊郭の一つ、可祝楼の楼主の家に生まれた野村可通は、明治後期にも
残っていた文使の風習を次のように記す(『伊勢の古市あれこれ』前掲)。

一夜をともした客が、翌朝宿へ帰ると、早速、天地を紅で染めた巻紙に、
恋々の情を認めて、これを金蒔絵緋房の文箱に入れ、子飼、仲居、または
男衆をして宿元に届けさせた。これを受取った客は、全く心温まる思いで、
大切に荷物の中へ仕舞い込み、いそいそと帰国の途についた。またこの深
情けが忘れられず、帰国も忘れて、滞在の日数を重ねる客も多うか^(ママ)ったと
いうことである。

(11) (1) 参照。

(12) 『羈旅漫録』、服部仁編『馬琴研究資料集成』5、クレス出版、H 19・6。

凡例

- 一、三重県立図書館武藤文庫蔵本を底本とした。
- 一、適宜、句読点・濁点・括弧・改行・字下げを加えた。
- 一、漢字は通行の字体を用いたが、固有名詞は原文の表記にした
がったものもある。
- 一、「ゝ」「く」は残したが、漢字の後の「リ」「く」等は「々」
に統一した。
- 一、虫損は□とし、推量した読みを()により示した。

神風の御恵

いづれの御時よりかはじまりけむ、伊勢の大神宮に太々御神楽といふこと有。「こは今めきたるさまにて、いにしへのさまにはたがへり」など、ものしり人はことわりありげにあげつらふもあれど、ものしらぬわれらは、たゞ家内安全をこひねがふの外なければ、此御神楽をとりおこなふは、いともありがたき身の面目になむありける。

時は天保九年といふ年のやよひに、かねてよりそのもよほしを、わが家の御師なる北御門ながしのもとにいひやりおきて、十九日のあかつきふかく家をいづ。

ほどなく新茶屋にいたれば、秋田屋何がしの家に、けふのまうけに幕張わたし、門にはむかひ札とてゆゆゆしく名をかきしるし、代官てふ人ども、ものくしく袴つけて、もてなしいとあつし。先まうけの席にいれば、提重てふもの、酒肴うるはしくとへのへて、とりあへず出しつゝ、つぎくゝに、なほなにくれの肴をてうじいだせれば、盃もあまたたびめぐるほど、うつくしく蒔絵したる文箱のながく大きなるに、紅綱の色あひ、えならずむすびたれたるを手にもちて、さたすぎたる女出来たり。こは七夕の文使にしては花なし、なにならむとおもへば、すなはち古市の牛車楼より饅頭てふものおくりこしたる使也。「こよひはかならず」など消息聞えたるには、若人どもの心は、はや時めきて、「御神楽の笛鼓のしらべより、先かの楼の三味線の声を」とおもふらんも、おのくまごころにて、神の御心にはかなひつべし。

「今は御駕籠の用意もととのひぬ」といそがさるゝに、「いざ」と立ていづれば、この家の内外にひまなく、あたりのさと人むれつどひ

て、「まかんせく」と耳かしましくいふは、則太々のならひにして、銭まくことをうながす也。かねてその心しらひしたれば、そこばくの銭をまきちらせば、われさきにとあらそひゝろふさま、いとにぎはし。駕籠には毛氈をまとひ、めさむるばかりの紅の蒲団をしけり。これ太々のしるしにて、太々駕籠とて人のめでよるこぶことなれど、いさゝかはれがましきかたもあり。されど、みちすがら人々の「それ太々さま。これ太々さま。銭まきたまへ」とそゝのかすにつけては、なか／＼にわれはがほにほこられて、ところ／＼にて銭まきちらし、いと心ゆくけふのさまになん。

小俣にていこひ、宮川にいたる。この川にいたれば、よものながめにはかにうちははれて、ながめおほかるさま、よにたぐひすくなき佳境なることは、今さらいはんも心おそけれど、けふの雨にて、よも山のけしき雲とぎして、そのひまより、あるはみえ、あるはかくれたる木立のさまなど、ひとしほなり。渡船はべちにまうけたれば、船人よばむわづらひもなく、はや船にのれど、しかる船人もなし。むかひの岸には、並木の桜をりからさかりにて、船のうちよりのながめいとよし。

花の波立わたらひの川の辺は坪の雫もにほふ春かせ

さて堤世古のほとりより道をかへ、二見のかたにゆきてみそぎしつゝ御師に入るがおほかたのならひなれど、けふは雨にてそのこと心にまかせねば、たゞに御師にいらんとす。かの北御門氏の家は、館といふあたり也。その門にいたれば、乞食ひまなくむれあて駕籠をとほさず、ひたぶる「銭をまけく」といふ。これもかねて心おきたれば、まきちらしつ。

さて御師の門は竹をたてゝそれに注連縄をひき、玄関には幕はりわたし、左右には高張てふ挑灯をかけ、いといかめしきかまへなるが、

これ、はた太々のしるし也。まうけの席はいときよくまうけなして、いとことさらびたり。さてかくのごとく御師に入るを、俗に「坊入」といふ。こはいかゞなるとなへなり。

茶菓子先いだし、入湯すみて後、あるじなにかし出来たりて、ゆゑくしく口儀あり。かくて膳部は先、雑煮てふものいだして、つぎくくにいとあつきもてなし也。されど若き人どもは、山海の珍味もめにつかず、そゞろにけふの消息のかへりごとせまほしきはひみゆるもをかし。

さて日もくるれば、又もかの楼よりむかひにとて、をのこを出したるに、わかき人ども今はえたへず、そゞろにいそがするにそゝのかさされて、かの楼にいたらんとす。玄関にいづれば、代官てふをのこ袴きて敷台までおくるに、左右の提灯には火ともしていとかめしきに、かの楼の提灯の車の輪の紋、紅にそめたる、かゞやきあひていとめざましきに、そをともしたる男の、かたへにうづくまれるなど、いと似つかはしからず。しのびありきにもあらず、儀式めきたることゞもみえず、いとあやしきさま也けりと、心のうちにほゝえまれぬ。

尾上坂の石いとおほく、足のふみどころたゞくしきも、さばかりくるしからず。いそぎ長峰にいれば、家々にともし火つらね、楼どもには三の緒の声々かしましきも、げに不夜城の妙境にて、あらぬさかひに来たらんごとし。かの楼にいれば、そのもてなし、いとことさらなり。こは、かぐらの客人は、このさとにては、うへなくよろこびもてはやすがならひなれば也。

先楼にのぼれば、やがてうかれ女どもむれいでたり。そのゐならぶさま三くさにわかれたるは、いとわかきかぎり、人なみにもかずまへられたると、又人なみよりぬけいでたると也けり。燭台あでやかに

ともしつらねたるをそむけがほなるは、衣の色あひもうるはしからず、身もあたゝかならぬきはならん。こは「末の松山波こさじ」とちぎりし人のためにせしなるか、又はまくらにまめやかならで、かゝるさまなるか。わざとゝもし火のもとによりて、あたらしき衣ほこりに瑠璃の光かゞやかしがほなるは、めにつくかたもあれど、中々にあはれはすくなし。

われこの楼には、はやくよりをりくものせしこともあれば、こよひ新枕ならで、かねて契をこめしうかれ女あるが、まちゑがほに出来りつゝ、かたはらに座をしめたるは、心のうち時めくものから、「うちたえてひさしく」ともいひがたきは、かゝるさとのならひなれば、まばゆく、はぢかゞやかしかたもあり。まことや、このさとにもものするは、はつか一年に一度ばかりのことなれば、心はあたかも七夕のごとし。さればけふの使の七夕の文使に似たるもゆかりなきにはあらず。

今宵あらたに来たるわか人は、そのあまたの花の中にも、ことに心にかなふをえらまむとすめり。そのかほをひそかにみれば、さすがにまほにもみかねて、めをなゝめにしていとくるしげ也。こはもとより心すべきことにて、たゞおもぎしのうるはしきをのみ心がくれば、よるのめたゞくして、もがさのあと、又は色あひくろきを、紅粉の色さしもて、たくみにつくろひえたるがありて、浦島の子が玉手匣ならねど、あけてくやしききぬく床、いともすさまじきためしもすくなからねば、たゞ笄の光と衣の色あひのあたらしきにめをつくれば、さばかりのたがひはなきものぞかし。

かくてその花どもゝさだまりたるか、えらみえたるもあり。いとつたなきえりかたなるもあり。「はや、よもふけぬ。いざ」とて仲居て

ふ女のみちびくに、おのゝその花を手づさへて別室に入ぬ。あやにくに春の夜のみじかきに、けふのつかれさへいでゝ、夢は、かりなる契をもむすびかねたれど、この一刻は万重にしもたとへつべし。

よも山のさくらみむともおもほえずこれはものいふ花の下ぶし
いさゝかまじろみたるほど、あはたゞしく枕をおどろかせるを、何ならんとおもへば、枕のかたはらに膳部ゆゑしくおきたり。こはこのさとのならひにて、よにいふ本膳をよごと客人にすゆる也。こもよにたぐひすくなきならひなるべし。

そもこの里は、ふるくもその名きこえねど、八文字屋本てふものに、「伊勢のあんじや」とみえたるがはじめにて、今も遊女のことを「あんさん」といへり。ちかきころまで「あんじや楊枝」といふがありしかど、そはたえたりとぞ。この「あんじや」といふことは、文字もさだかならず、いと心えがたき名にこそありけれ。

このさとのならひ、さばかりたくみに人をそゝのかすることもなけれど、時間の鼓、ねよとの鐘などはなく、たゞ何となくおほどかにゆたかなれば、旅人は囊錢むなしくなして、なほこりずまにたちかぬるが常也けり。こはいともくおそるべきさとのならひなりや。

廿日。朝とく、かの御師のもとよりむかひ来たり。こは、かの代官てふひと、袴つけていかめしく口儀のべて、楼には似つかはしからず、いとをかし。うかれ女のいとぎたなくて、きぬぐのなごりをしみるあへぬも、中々にあはれ也。きのふの雨なごりなくうちはれて、いとこゝろよし。楼をいで、御師にかへりて朝飯をくひ、ゆあみなどして、きのふ雨にてはたさゞりし二見のかたにもものせんとす。

かの毛氈まとひたる駕籠にのりていづるほど、又も乞食おほくむれ

て、いとくちかしましくそゝのかせば、ゆくゝ錢をまきちらすになむ。

二本木といふをすぎ、畑道にいづるほど、そこかしこのさくらひとめにみえて、いとほなやかなるに、をりにあひたる菜花のほひも春めきて、けふは日さへうらゝかなれば、なにとなく心もうきたちて、うちさゞめきつゝ、いと艶にあでやかなるゆくてのさま也けり。

ほどなく二軒茶屋にいたりていこひつゝ、黒瀬といふにいたる。このあたりにも、里の子どもいとかしましく錢をまかしむ。汐合の渡のほとりにて又もいこひて、ほどなく船こぎいださせ、むかひのきしにいたり、ほどなく二見村にいたりて角屋といふにいれば、又昼飯の用意してもてなしあり。この家にも幕はりわたし、かのむかひ札をたてたり。

いひ食はてゝ、こゝよりは、かちにてゆくほど、家々より例のまき錢そゝのかせば、その家々のうちにまきいるゝを、家内の人々あらそひゝろふめり。ほどなく浜辺にいづれば、尾張・参河の山々そこはかとなくかすみわたり、波の音もいとどかに、うらゝかなる春日のさまいひしらず。

さて石の御まへをゝがみて、そのあたりにて手水鶴飼しつゝ、こゝちもいとすがゝし。こゝより鳥羽の島々のかすめるをみるけしきもいとよし。そもこのたて石とまうす石に注連縄ひきわたして、今は神としも申奉れど、ふるくはものにみえず。こは後の世にあたり山たえて、そのなごりにかゝる石出現せし也といへり。さればふるきこのうらの図には、このふたつの石なしとかや。そはことわりあり気なり。ふるく『源重之集』に、「玉匣二見の浦の中におつる月のかけらぞかゞみ也けれ」、又『草庵集』に「月かげも波にぞうつる二見がたいづ

れ神代のかゞみなるらん」などいふうたのあるはいぶかし。たゞ伊勢の国なればかくいへるか、又二見の浦に鏡のつたへなどのありしものか、いかゞあらむ、考べきことなり。

このうらのほとりなる御塩殿は、今も御塩調進の殿にて、調進の器物いと古雅也。われいまだそこにいたりしことなければ、ゆかまほしけれど、こたびはさるみやびにはあらぬつひでなれば、「いざ」ともいひかねつ。

かくて汐合の渡をわたり、堤にそひて宇治の方にもせんとなす。やゝゆきて小朝熊神社ちかくをがみ奉らるゝに、をりからさくらもこれかれ見ゆ。

御かゞみにおのれならひてさくら花風はふくともよそにうつるなとよめるは、この御社の神鏡のふるごとをおもひて也。こは『沙汰文』にくはしく見ゆ。今も鏡宮と申て鹿海村といふにましくて、式社なれど、このあたりは国がらにて式社などはおほくましますば、そのこととりたて申はかへりておこがましくや。このむらも桜おほし。

かのみゆる鹿海の里に白雲とまがふは花のさける也けり

昔「さくら木のさと」ゝいひしもこのあたりなりとかや。こゝはもとより川のほとりなれば、水をへだつるさくらのさま、ことによし。かく道すがらさくらのさかりにあへるは、これひとつの幸なり。

楠御村をすぎ、やゝゆけば、右には西山の桜、左には西行谷・菩提山をはじめ、そのあたりの花ひとめにみえて、いひしらず。この西山といふは、荒木田ながしの家の庭なるが、うしろの山をやがて庭につくりなして、四時のながめとりくゝなる中にも、さくらはことさらおほしときゝしを、かばかりとはおもはざりしに、一むらの雲のごとくにみゆるは、数かぎりなき木立と見ゆ。こはちかきころまで長官な

りし、なにがし殿が風流の人にて、かゝるたくみしいでられしも、今の主は風流ならで、すてがち也とかや。をしむべきこと也。

又西行谷・菩提山も名あるところにして、幽邃なる花のさま、みまほしけれど、こたびのごとく繁華をむねとせしついでには、こゝも、はた、いかゞなれば、え立よらず。

宇治の町に入て宇治橋のうへよりみれば、林崎文庫のさくらさかりにみゆ。こはいにし文政十二年といふとし、この文庫の碑文、わがともがらはかりて、本居翁の文を多りてたてたりしが、そのをりは、かばかりさくらもおほからざりしが、つぎつぎにうゑたるものなるべし。

石ぶみのちとせうごかで文の花さくらとゝもにさかえゆくらむ

五十鈴川にて例のごとく手水鵜飼しつゝ、むかひを見ればあまたのさくらさかりにて、ことにいひしらず。うしろには鼓嶽そびえたるに、花の木間をかよふ柴人ののさまなど、いとよしあり。そのさま身におはずとはきけど、さるかたに又みやびたるかたもあるをや。

末たえぬみもすそ川にかけみえてひたすもきよき花のしろたへ

いすゞ川むかひのさくらかけみえてにほひながら手をにむすぶかな

かくて大宮にまうでたる。かしこさはいはんも中々おそれあり。さて太々のならひは宮引といふものにするべせさせ、半神楽といふをたてまつりて、御門のうちに入、玉串御門のまへにうづくまれば、あやしき装束きたる人、祝詞をさゝげ、はては御供御酒をいたゞかすることあり。このところにて拝するを、同伴の人どもはいとかたじけなしといへど、われは押し奉らず、いつものところにて押し奉れり。そもこの大宮に諸人参詣のためしは、むかしなかりしことにして、『延喜大神宮式』に、「凡王臣以下。不得輒供太神幣帛。其三后皇太子若有

応供者。臨時奏聞」とあるをおもへば、凡人のぬき奉ることなどは、いとかしこきことにして、よの常の拝所にてふしをがみ奉るだに猶かしければ、まして御垣のうちにてはさらなり。正員禰宜たちをはじめて、大官司、あるは勅使にても、すべて版位まうけたる石坪にて御拝あり。されば宇治山田の人々の、その又うしろにて拝するは、いとことわりに昔はおぼえて、かの大和魂みがきし心まどひに、宇治山田人の拝所にて拝せしかど、よくおもへば、身に官位はあらず、又神郡の民にしもあらねば、中々にいかゞにて、たゞ今の御代の御さだめにたがはざるこそよけれど、そのうちそのことはやめて、諸人の拝所にて今はをがみ奉るものから、御垣のうちにてはさすがはゞかりしも、なほなまものしりのくせなるべし。

さて御まへに「天照皇太神宮」とかきたる白きぬをはりたるは、いとをかし。こはおほやけならぬことにして、このこと都に聞ゆれば、おもき御とがめもあることなるを、しひてうしろめたきことなしたるは、神の御名うり奉るのわざにて、いみじき罪人といふべし。

さて荒祭宮を、がみ奉り、風宮にもまうづ。この宮のほとりをながれて、いすゞ川におちいる川一すぢあり。これ則みもすそ川也ともいへど、みもすそ川はいすゞ川の今ひとつの名としもいへば、いかゞあらん。

御山をめぐりしほど、花もこれかれあり。

わが袖も淨衣めきて神路山ちりこそかゝれ花のしろたへ

かくて又も楠部にかへりて勘七といふ家にいれば、こゝにも幕はりわたし、例のごときもてなしなり。この家は楠部川のほとりにして、楼はやがて川にのぞみたれば、欄によりかゝりて煙ふきつゝみわたしたるけしきいひしらず。

とかくするほど、この川のほとりに里人おほくむれきたりて、銭まくことをうながせり。川水ふかきあたりになげいるれば、たちまち赤裸になり、みどりなす水底よりやすくとゝり得めり。

さて「けふのむかひ也」とて、うかれ女ども、この家きたりて、たゞおもゝちのみ人まぢがほなるも、若人どもはわりなくよろこびて、うれしさほにいだせるはかたはらいたし。中にはえたへず「山海の珍味よりは、この花どもこそ、いたりふかき御もてなしなりけれ」と酔なきするもあり。

川のむかひに「竹ぼら」てふものふくにおどろけば、こは「むしぶろ」とて一くさ、さる浴室このさとにありて、その「むしぶろ」のとのひたるを人にしらするべ也といふ。

かくて「日もくれぬ。いざ」とていづれば、かの高張てふものに火ともして、まぶさきにたてり。むなしく駕籠にのるもあり。又妓と手たづさへてかごにものらざるは、かの木幡山のためしをおもへるか。又おのれとあゆみて妓をかごにのせたるもあり。

とりかくにさゞめきて、ほどなく古市にいたりぬ。この高張てふものは、楼の門の左右につきたてゝ、そをもてる人は平伏せり。その中をしたりがほにうかれ女の手たづさへて、その楼にいるは、いとあやしき、よにまたゝぐひすくなき遊なんめり。

こよひこの楼のをどりをみる。このさとにても、この家ののをどりは、わきてそのさまえん也とかや。廻廊には紅の挑灯ともしつらね、わらはどもは提灯ともして、もうけの席の入口までしるべす。その席は、名だゝる桜の間にして、ひるのごとくともし火ともしつらね、幔幕をはれり。やがて拍子木うてば、チカ(タ)地方とて三の緒、又胡弓てふものする妓、左右より三人づゝ出来たりて、毛氈のうへに座をしむると、やが

て百千の雷のごとき声して椽はゆらめき、いついかなることかとおどろけば、その椽に高欄いできて、又桜のかたをぬへる幕めくもの、その椽につきてあらはれいでつゝ、そのさまいとめざまし。かくて伊勢音頭といふもの、かの地方にてうたへば、拍子につれて一時に妓女どものをどりいづるさま、いとめでたく、首尾よくとゝのへり。この音頭をしばしのほどはむなしくうたひて、ほどよく一時に妓女のあらはれいづるさま、ことによし。「この伊勢音頭ともしもいふものは古風や」とて、なまさかしらにいひおとす人もあれど、こはわがいせの国にはおのづからよく具したるものにして、この国内にては、いかにたくみなる絃歌とても、この右にいづることあたはずとぞ。

こよひ夜中ばかりふとめさめぬ。月いかならんと、かの廻廊のほとりにいたれば、あたりの桜五ひら六ひら夜風に吹かれて、足もとにひらめきぬ。こははやく人しづまりて、はらふ女どもゝなきなるべし。中々にいとみやびやかにて、かゝるものさはがしきあたりともおもしろ。欄干によりかゝりて、「こゝろあくらん人に」とおもはずうちずんじたるを、かたへぎゝしたる妓はいぶかしむめり。

廿一日。天気よし。朝とく例のむかひ来りて「はやく」といそがすは、けふの御神楽一番の鬮にあたれるとて也。こは二番にあたれば、時刻おくるれば、一番にあたれるを幸とよるこぶこと也。

御師にかへり、ゆあみなどするほど、「今は御神楽はじまれば、いざ」といふに、麻上下ゆゑくしくきて、その席にいたりてそのさまをうかゞふに、御むろは則、御山といひて、袖もてひまなくかこひて、四隅にはたまをかけつらねたり。前には釜をおき、四隅の柱はうるはしき金綱にてまき、あたりにはひまなく白ゆふをかけたわし、いとも

くゆゑありげなるかざりざまにて、神楽衆といふは、いと所せきまゝゐらびたり。

はじめには、先家内の穢をはらふ行事あり。それすみて主の拝あり。この拝はよの常の師職にてはなりがたく、家にゆゑよしなくてはなしがたきを、この家は大宮司家の改所つとめらるれば、則緑袍にて神拝の祝詞あり。これよりその神楽はじまりて、老女まひいづれば、鼓・笛・大鼓などうちならし、うたひものあり。そのうたひものいかなることとも聞とりがたく、古雅ならず、今めかしからず、一種の拍子なり。この大鼓のなる時々、この席へ錢をまくがならひ也。つぎくりに舞ありていとながく、半すみたるほど席をしぞきて、赤飯にてもてなしあり。かくて又もとのむろにいり、山舞・扇舞・四手の舞などいふ舞はてゝ、則「神拝せよ」とすゝむれば、御山ちかくをがみ奉る。この三つの舞は拍子もにぎはしくて、いと心もかきたつやうにあんなれば、ことさらにこの時錢をおほくまくなりけり。すべてのさまいとかたじけなく、にぎはしきもの也。

そのかみの岩戸のためし人の世になをつたへたるあそびなりけり
ところせくちか頃ぬさ代とみさかえ人はうきせにおちぬ御恵
ことはつれば、麻上下つけながら、外宮にまうでんとす。

門をいづれば乞食をびたゞしくむれ居て時錢をうながしつゝ、道もさりあへず、足もとをさまたぐるばかりなり。此御門より入れば、このあたりさくらいとおもしろく咲たり。御山にはさくらおほく、こゝかしこにみえて、いとよし。

例の宮引に案内せさせて、神前の拝、半神楽などたてまつるさまは、内宮に同じこと也。こなたにては末社めぐりといふがあり。この末社といふ御社どもは、ふるくものにもみえねど、太々にはかならずめぐ

るためしになん。その御社は数いとおほく、御屋根の下に札うちて御社の御名どもを書したれども、もる人どもはいかゞ心えたるならん、その御名をまうし奉らず、「これはなにさま、かれがなにさま」と口よりいづるまゝなるそゞろごといふこそ、いとうけがたく、かたはらいたけれ。中にはその札をよませじと、札のまへに四手かけてかくしたるさへあり。宮鳥とて、人々のにくみきらふも、うべなること也けり。

かくて高宮・風宮・土宮にもまうで、一の御門にいづ。こゝは桜いとおほく、中道といふあたりの並木は、あたかも雲のごとし。

たぐひなき大宮とてや咲つゞく花も垣なすみかどなるらむ

あづさゆみながき春日も猶あかじひきとようけの宮のさくららば御師にかへり、式の御膳といふをみる。こはみまへにそなへ奉りし也とて、いときよらかにみやびたるさまなり。さてあるじいで、盃事あり。あるじは烏帽子・狩衣にて、盃は古器、長柄銚子てふものにて、いとことさらびたり。それすみて答膳あり。こは白木の膳にて、よに七五三といふ料理なればめざましく、身にはかに位つきたらんがごとくにおぼゆ。鳴の羽盛・みな籠などいひて、世にめづらしきものもみゆ。火ともすほどこの膳はてたり。

廿二日。けふも天気よし。若人は皆、朝熊嶽にのぼる。そもこの朝熊嶽は、みねに仏刹ありて、かりそめにも両宮の御ことにはかゝづらはぬ山なるに、いかなることにか、太々には山行といふが一日あり。よの常のためしは、新茶屋より二見にものして御師に入、つぎの日内宮にまうで、それより朝熊にのぼり、楠部にくだり、そのつぎの日御神楽あるがならひになん。さるを、こたひは、はじめの日、雨ふり

しかば、山行はおくれにたるを、若人は「いざ」といへど、われはもとより朝熊にのぼることをいかゞにおもへば、けふはゆかず。天の岩戸にのぼるも例なれど、こは身のけがるゝこと、かねてきければ、このかたはしひておしとゞめたれど、朝熊まではさのみとゞめがたくて、若人の心にまかせつ。されど御師にひとりとゞまり居て、ながき日むげになさんも口をしければ、われは前山の花みにもす。そは、いまだ所のさまをしらざれば也。

まづ中道のさくらをみつゝ、豊宮崎文庫にいたる。この御庭の花は「御屋根ざくら」とて、外宮の宮殿の御屋根におのづから生たるさくらを、こゝにはうつせる也。いかなることにか、このさくら一くさにて常の木どもよりはことさらにはやくして、今は青葉がちなり。庭にはひまもなくちりしきたるさま、雪のごとくにして、盛のさまおもひやられたり。

大宮にねざしそめたるさくら花神風ならでたれかちらさむ

雪ふるき言葉の花もうづたかくつもりきにけむ文庫の春

此桜の中に去年の八月の西風にたふれたる一本ありて、横になりながらつゝがなく花の咲たるを、よにめづらしがりて、この春はかしましくもてはやせりとぞ。

たふれたるさくらをみてもおもひしれ言葉の花のつきぬねざしはこの文庫の書院はいとひろくして、ふすまの画は円山応挙にて、いとめでたし。床には蒔田器が「蘭亭記」・せるをかけたるも見事にみゆ。

かくて高倉山のかたはらをやゝゆけば、世義寺の桜ひとめにみえて、いとおもしろければ、かへさにはかならずと心にやくしてやゝゆけば前山村にて、家居はところかくにまばらなり。道のかたはら、あるは

山にをりくさくらはみゆれど、さばかり音に聞えしさまにはあらず。やゝいりて和泉式部社、又前山村の氏神の御社などいふがあり。和泉式部の社といふは、いかなるゆゑよしありてこゝにはあるならん、いといぶかし。このあたりまでは、かの御文庫より道のほど一里あまりもあるべし。

このあたりに谷川もありて、そのきしなどに、いと大木なるさくらの株はこれかれおほけれど、木立はなし。やうくおくのかたに、老木の一本さかりなるをみつけたるは、せめてものことにて、いとうれし。「前山の桜く」と、よにひろく人のしりたるあたりなるに、かく殺風景なるをいかゞといふに、この桜おほくては、おのづからみる人もおほくて、畑におふる菜・麦などをわりなくふみあらしなどすれば、この村のためには、桜は、はなはださまたげとなることおほきとて、つぎくりに里人どもがきりつくせしなりとぞ。こはさがりたきことにもあれど、まことに花を賞するともがらは、田畑のものをむげにしかせんや。こは花をかごと酒のみくふ酔狂人どもがあしき也。その酔狂人とこの村人のしわざをくらべなば、なほ酔狂人のかたこそ罪ふかゝるべけれ。

その一本の陪にてしばし煙をふく。

前山のむかしの春ぞしのばるゝ一本の花をおもかげにして
前山や一本のさくらのこらずはおもかげながらたえやはてなむ
まへ山のさかりいかにとゝひくればこたへがほなる花のひとつと
しらざりしそのおもかげも立そひてむかしゆかしきまへ山の春
おろかなるものとや花はおもふらむむかしおもひてまもるくひぜ
を

かくぞとはしらではるくたづね来ぬ一本のさくらあはれとは見

よ

かくてもとの道にやゝかへりて、道をかへて中山寺にいたる。入口の並木に桜もありて、さかり也。門には「神護峰」といふ額をかけた。門をいけば庭にもこれかれさくらあり。そもこの寺は、開山なる宝鑑国師が開基の地をえられし時、そのをりは、「この寺のふもと街道なりしかば、このところよりは、今の古市のあたりに寺たてんかたこそ、しづかにてよかんめれ」と人はすゝめしを、その国師地相をみて、「こゝはとしへて後、繁華と変ずべし。なかくに今の街道こそ、後に寂寞の地となるべけれ」と先見をさだめて、こゝにしもたてられたるなりとぞ。その先見むなしからで、つひに街道の変じたるは一奇といふべし。その国師は愚道和尚といひしなるを、後水尾の法皇の御帰依ありて、国師の号をしもたまへる高僧なれば、さばかりのしるしはありしものなるべし。さるゆゑよしある寺なれば、いと幽邃の地にして、紅塵のけがれなく、不夜城は千里外にへだてたらんがごとく、心すむあたり也。

時のまに色のうきよをのがれ来てこゝろしづかにみるさくらかな
この寺の奥院は弁財天にて「降魔」といふ額は清人吳壬祿の筆也。
こゝに紅葉いとおほく、秋のさまおもひやられたり。この奥院よりは、高倉山などひとみにみえて、いとけしきよし。

かくて世義寺にいたれば、庭にさくらいとおほく、さかりなり。坊どものおほくあれて無住となれる、又は本堂の破壊したるなど、なか／＼によしありてみゆ。本堂のまへなる茶屋にて、わりごひらきて心しづかにあそぶ。

人すまで風のまにくちる花の雪とこころせき寺の庭かな

かくて山にものぼり、この寺のうち、こゝかしこみめぐりつゝ、入

門寺のまへにいづ。この寺の門のほりにもさくらこれかれあり。さ
ていまだ日もなゝめならざれば、妙見山にのぼるに、妙見堂のかたは
らに一木のさくらさかりに咲たるが、しかも大木なり。

ところがら星のやどりと咲たちて一木の花も雲と見ゆらむ

この妙見山よりむかひの山をみれば、ことのほかにさくらおほく、
おもひの外なるながめにて、ふりはへて見にくるにたれるところのさ
まなるを、ことさらにとりたてゝこの所のことを人のいはざるは、い
とをしむべきことぞかし。

咲つゞくむかひの山は白妙に見えてえならぬ花ざかりかな

それより常明寺にゆけば、こゝにもさくらこれかれあり。

この寺の常明らけき名によせてことさらはるゝ花の夕ばえ

山田の地は、わが松坂にくらべては、こよなくさくらおほくして、
さばかり名なきあたりまで、あまた木立のみゆるは、花のをりには必
ふりはへくべきところにして、中々に神都とはいはずして、花の都と
こそいはまほしけれ。

廿三日。天気よし。けふは休足とて、一日とゞまるがならひなれば、
よべより古市にとゞまれり。長き日もさすがに解語花陰にはみじかき
こゝちして、くれちかくなりぬ。

お岩のさくらいかならんとゆかしければ、妓をともしひてみにもの
す。寂照寺の桜もさかりにて、^榎嶽楼のほりにもさかりにみゆ。観
音堂にまうでゝ、庭なる花の木陰にやすらふほど、日もくれかゝりて、
あたりの楼の三の緒の声はいとかしましくなれゝど、なか／＼に木下
はしづかなり。

みる人はかへりつくして夕まぐれひとりたえく／＼ちるさくらかな

日くれはてゝ、「今は」とかへるほど、

わすれめやものいふ花も立そひてあでやかなりし花のゆふばえ

廿四日。天気よし。若人は「雨いみじくふれかし。そをかごとに今
一日を」とおもふもあるべし。五日の日数は、たゞ春の夜の夢のごと
くにして、きぬかくのわかれ、いとたゞならぬを、例のむかひにいそ
がされて御師にかへれば、「いでたちの本膳」とて、又もか／＼の
珍味をつらねたれど、若人は、なが峰のかたに心のこりて、むねふた
がりけむ、しぶ／＼なるくひさま也。

「今は」といづるに、けふもかの駕籠にて新茶屋までおくる也けり。
乞食、例のむれたれど、若人は錢ちらさん勢もなく、ものうげなり。

堤世古にいたれば、かの妓どもおくりにとて、はやくもまちまうけつ
ゝ、宮川までおくるがならひ也。けふは日いとうらゝかにて、大路の
さまいとあでやかなれど、ゆくさの雨よりは、なか／＼に若人はうち
しをれがちにて、宮川の船こぎいだすほどは、牽牛のこゝちして、天
の川にもなずらへおもふなるべし。

かくて新茶屋にて提重てふものにてもてなしあり。ゆくさのさまに
さのみかはれることもなければ、何となくものすさまじげ也。かくて
ふたつの川をわたり、日くれはてゝ家にはかへりぬ。

そもこの太々神樂は、そこばくの金なくては執行しがたきによりて、
おほくは講てふものをむすびて、多人の力もて執行するがおほきを、
たゞみづからの力もてこたびのごとく執行せしは、ためしすくなきこ
となりとぞ。さるは人かすならぬ身をもすて給はぬ両御宮の神風の御
恵ならんと、いとかたじけなさに、ありしこともをあら／＼しくかき
つゞりて、一卷となせるは、これそのさまを人にもしらせんとてのこ

となれば、雅にはとほく俗にはちかくて、さとびたる詞がちなり。

天保九年といふとしのやよひ

小津久足

（付記）

本稿を成すにあたり、三重県立図書館・日本大学総合学術情報センターには貴重な書籍の閲覧・翻刻許可を賜った。ここに記して、感謝の意を表します。

（ひしおか けんじ・有明工業高等専門学校）